

ローソク足の読み方

「ローソク足の読み方」と表現するものの、チャートからローソク足を読み解こうとすることは非常に感覚的なことであり、一律に文章で伝えることは非常に困難です。

最終的には、一人一人がチャートと何百、何千時間と対峙する中で、

「調和が取れたチャート形状」

「調和されたローソク足の並び」

を細胞レベルで染み込ませていくしかありません。

ローソク足を読めるようになってくると、週足から始まってどの時間足でもローソク足の形成動線、細かなプライスアクションから、その後に起こりうる流れをイメージできるようになってきますから、ローソク足をマクロ、ミドル、ミクロの視点からアプローチする技術を日々、磨いていくべきでしょう。

青牛式トレードマスター講座

まず、ローソク足の読み方の総論については、この「ローソク足の読み方」のライブで解説していますので、このコンテンツで不足する点は、ライブで理解を深めてください。

https://twitcasting.tv/aoushi_fxtrader/movie/672239701

○ローソク足を分析するスケーリング

次に記載している「マクロ・ミドル・ミクロ」の区分による分析を『すべての時間足ごと』に行っていきます。

マクロ・・・全体のチャート形状 パターン認識

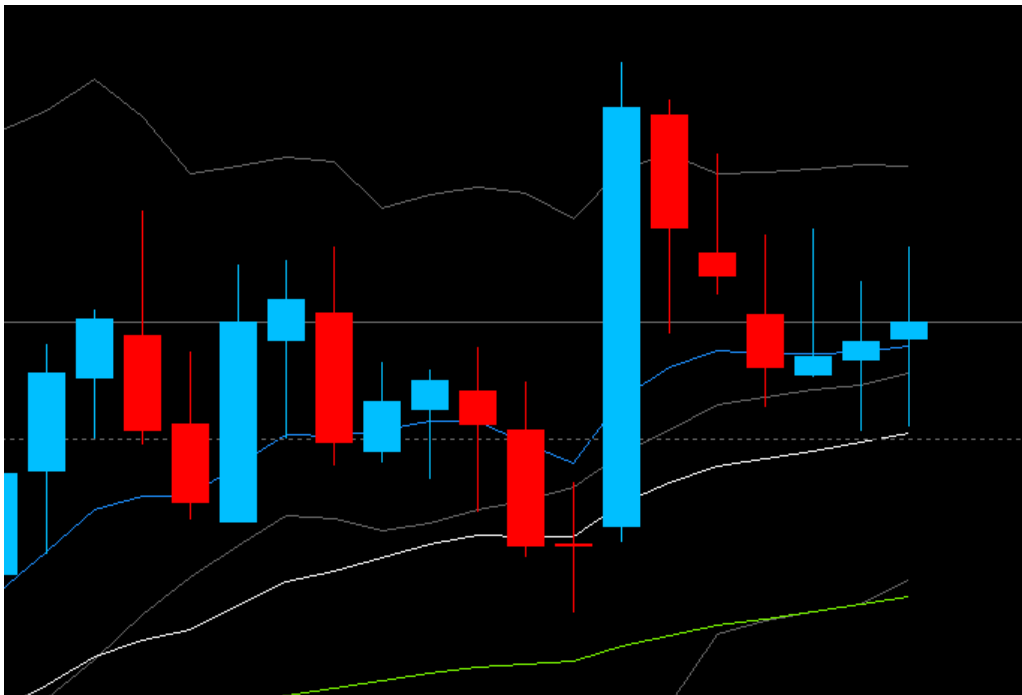
ミドル・・・直近のローソク足の並びが意味すること

ミクロ・・・1本のローソク足の挙動、形成過程

青牛式トレードマスター講座

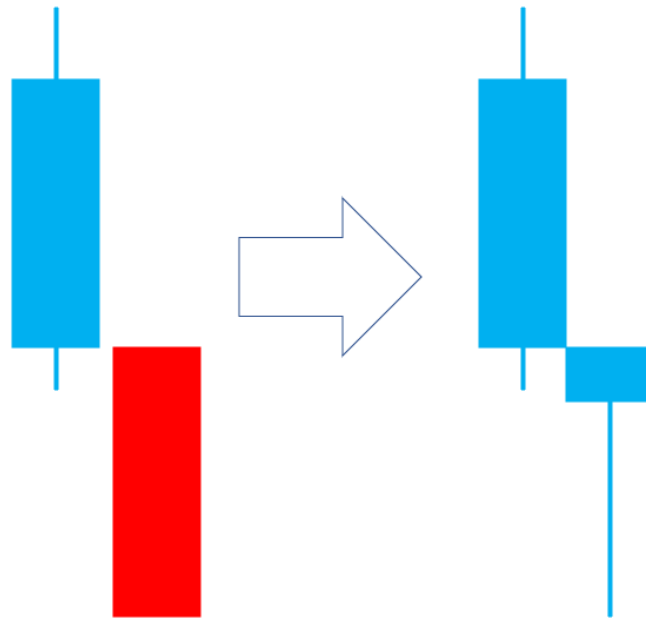


マクロ：全体の形状や流れ



ミドル：個々の配置や OHLC の関係

○ローソク足とエントリータイミング



ミクロ：確定した状態をイメージ（見越した）したエントリー

そして、個人的にはローソク足の読み方という技術が意味することは、完成されたものを語る過去形ではなく、**未来の完成形をイメージしながら、その形成過程で優位性の高いエントリーを実行していくこと。**

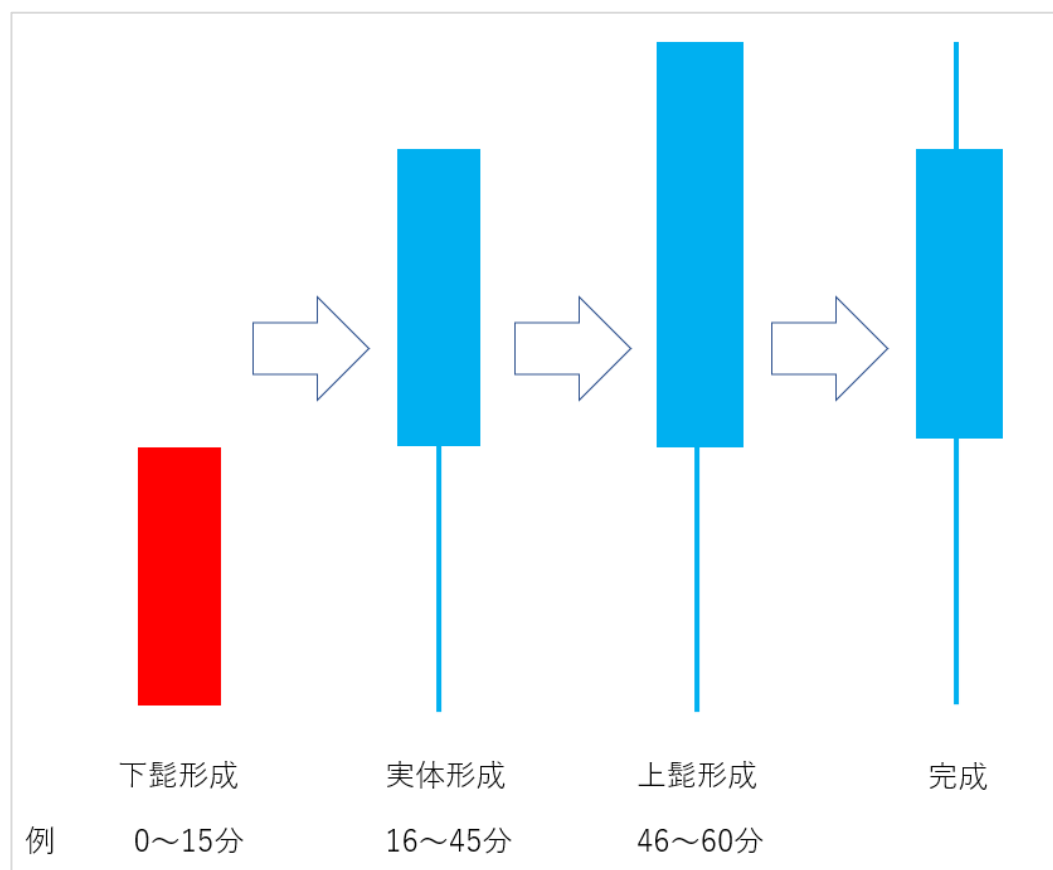
つまり、完成されるであろう形状をイメージしながら、それを見越して現在進行形でエントリーしていくことに本質的な価値があると考えています。

青牛式トレードマスター講座

出来上がったローソク足を博識ぶって語る人は巷に溢れていますが、形成過程の重要性を説いている人が少ない理由は、それだけ感覚的な部分が多いため定量的な情報として取り扱いにくいということだと思います。

○ローソク足と時間の関係

次に、ローソク足は時間足ごとに確定する節目があるわけですが、その節目ごとに存在する一定の規則性について解説します。



青牛式トレードマスター講座

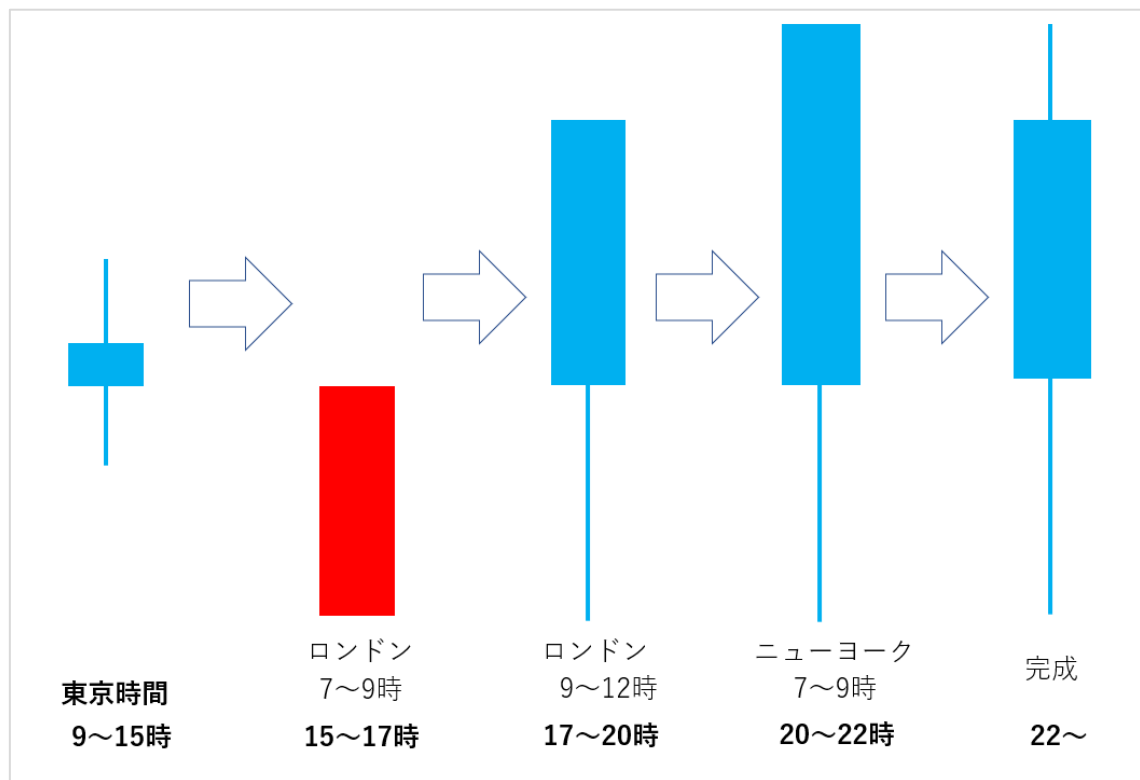
区 分	下髭形成	実体形成	上髭形成
1 時間足	0～15 分	16～45 分	46～60 分
週足	月	火・水・木	金
月 足	第 1 週	第 2・3 週	第 4 週

※陰線の場合は、上下を反対に読み替えること。

日足については「東京→ロンドン→ニューヨーク」という「各市場の時間」という節目と関連性が存在しており、『ロンドン 7 時からロンドン 9 時に髭を作りに来る』という傾向をおさえておきましょう。

ただし、日常的に確認できる総体的な値動きとしては、東京時間のストップをロンドン時間で刈り、ロンドン時間のストップをニューヨーク時間で刈るという規則性の方が優位性として高いと考えています。

青牛式トレードマスター講座



日足の形成と市場時間との関係イメージ

また、表では1時間足を例としていますが、下位足になるにつれて値動きはノイジーになっていくため、この規則性も成立しづらいということも認識しておくこと。

青牛式トレードマスター講座

○テクニカルシグナルとサポートラインとの関係

プライスアクション発生を限界まで見極める場合、その最も直接的なシグナルとして「ハンマー（下ヒゲ）（ピンバー）」の確認を行うわけですが、最も重要な考え方として、「ハンマー単体に意味があるわけではなく、**総体的な関係の中でその意味が生じる**」ということ。

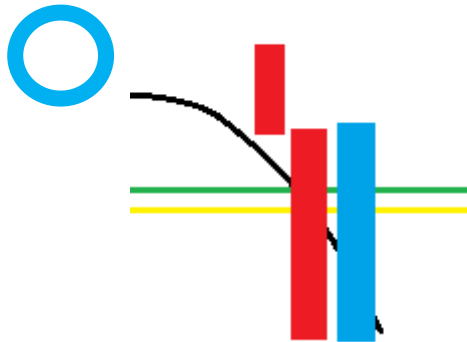
最も具体的な要素としては、共通認識性が高いサポートラインとダウ理論上の重要なポイントでハンマーとして出現していることなのですが、ダウ理論上はある程度、適切な場所であるにも関わらず、サポートラインとの距離感を考慮した場合に、**ハンマーにならない方がいいケース**というものが存在します。

私自身、この概念に気づき実戦レベルで使いこなせるようになるまでには、かなりの年月を要しました。つまり、それが分かるまでは形式的なハンマーという理解しかしていませんでした。

では、具体的に「ハンマーにならない方がいいケース」について説明していきます。

結論をチャートで表すと、次のようになります。

押し目買い場面・・・



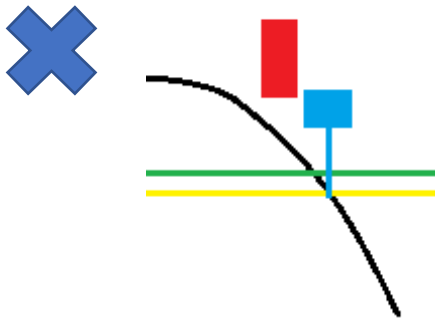
重要な SPL とテクニカル指標 -2σ を貫通し

陰線坊主で確定

→ 貫通する意味

SPL = 価格割安

-2σ = 平均価格からの乖離



重要な SPL とテクニカル指標 -2σ にタッチ

しハンマー確定

→ 価格は割安ではなく、平均価格から

も乖離していないため中央バンドへ

回帰しない = 反発しない

ハンマーが発生する場所の重要性については前述のとおりですが、ライブ内でも解説しているように、ダウ理論上の重要なポイントつまり Higher-Low 形

成場面を迎えている場で、「**どこでそのローソク足が、どのような形状で確定するのか**」を最も見極める必要があるのです。

ライブでは 39 分あたりから解説しているのですが、Higher-Low が確定したと視認するための形式的な形状はハンマーなわけですが、プライスアクション単体という視点の場合には、形としてハンマーとなったかどうかは関係ありません。



つまり、値動きの構造的背景として「その価格で終値が確定した」という事実のみでも、モメンタム発生 of 動機づけとして十分だということ。

青牛式トレードマスター講座

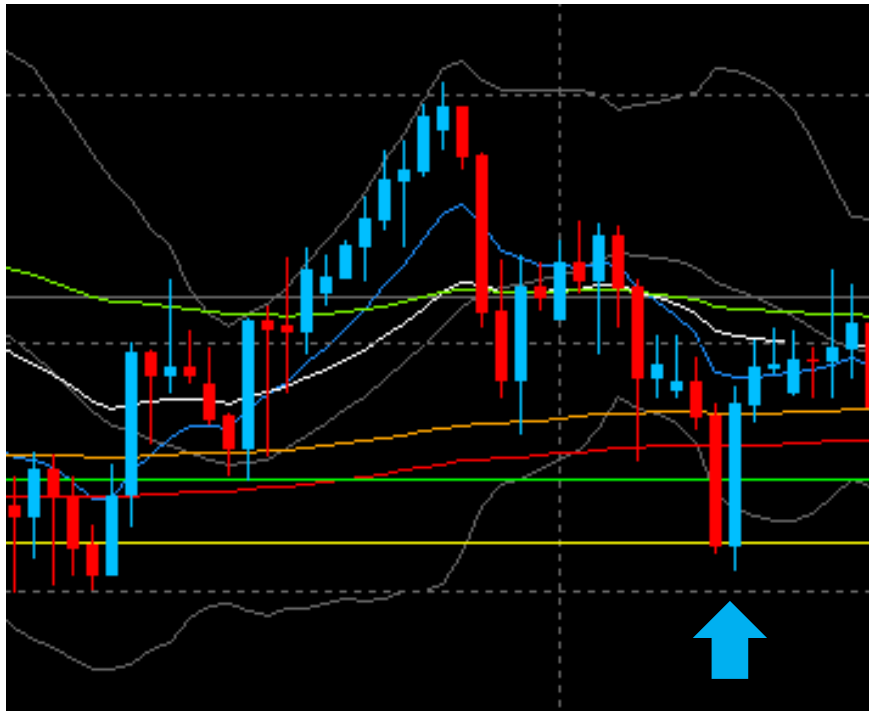
そして、ジャンプするため⇨上昇するためには、地盤が硬くなければならないという原理原則として、サポートライン手前でハンマーとなってしまうのは足元が緩い価格帯であるため、むしろハンマーで確定することがそのセットアップの優位性を下げてしまうケースがあることに對し、共通認識性が高いサポートラインまで到達し、そこで終値として確定することでダウ理論上のHigher-Low が成立することもあるのです。

それが、いわゆる**陰線の坊主**です。

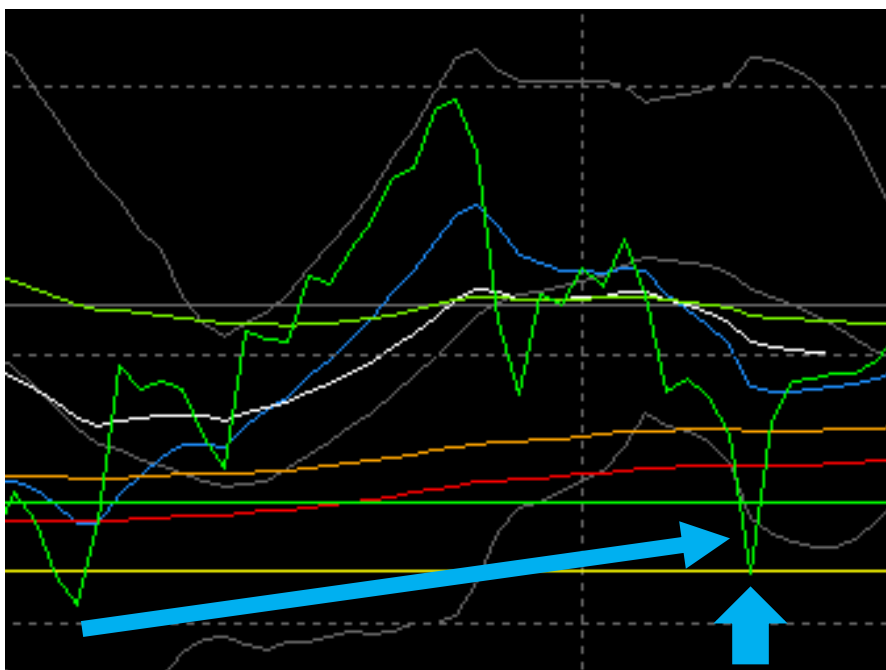
「Alt + 3」でラインチャートとして表示させればよく分かりますが、「終値のみを重視する」ダウ理論において、ローソク足形状ではなく**「終値で確定した」ことが本質的な意味を持つ**ということ。

世界中のトレーダーが、ローソク足でチャートを見ているわけではなく、バーチャートやラインチャートもあり、更には証券会社によってローソク足の確定形状も異なるという背景を考えれば、「終値で確定する」ことが確認できればそこに優位性は存在しているのです。

青牛式トレードマスター講座

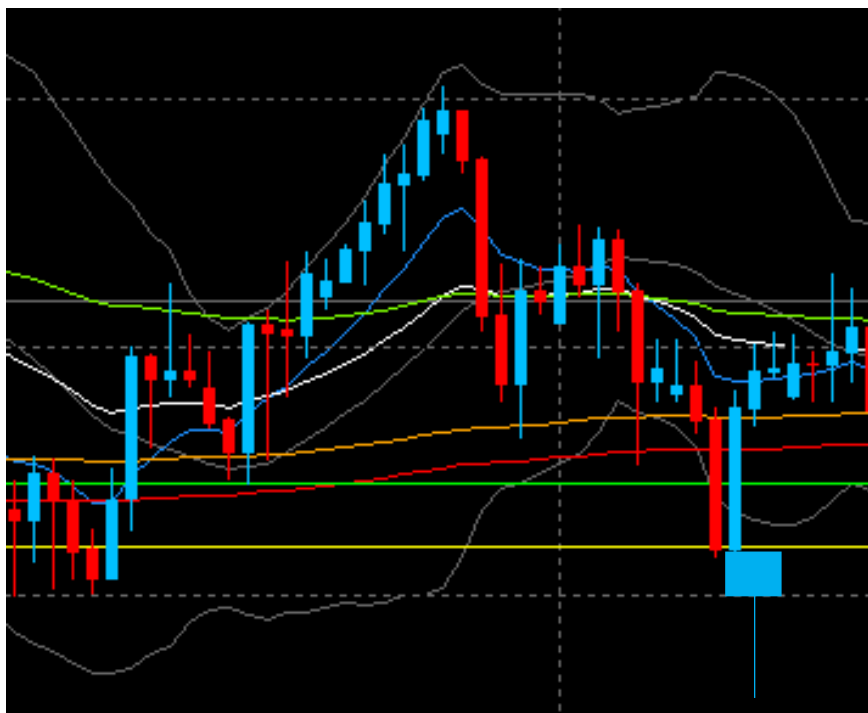


陰線坊主で確定からの上昇



終値ベースでの価格の切り上げ

青牛式トレードマスター講座



一般論としては、このような形になることが「正統」



陰線坊主で押し目形成している値動き

地球上に存在する様々な生物や同一種であったとしても、それらには必ず
「固有の特徴」が存在し、それらは完全ではないものの、時には見極めが可能
な「一定の規則性」として認識することができます。

そしてチャートとは、相場参加者つまり人間の集団心理が創り出す二次元
の現象という前提に立つならば、そういった規則性が存在すると考えること
が自然ですね。

絶対法則ではないものの、この「ローソク足形成過程の時間的特徴」を理
解しているかいないかの差は、実戦レベルでは非常に大きな差となるので確
実な技術となるよう培っていきましょう。

いずれにしても、「チャートはこうあるべきだ」という感覚というのは、小
細工抜きで物理的にチャートと向き合うこと以外にありません。



自然界でも、人の手が創り上げたものでも、「人間が美しいと感じる」ものには、普遍的な法則が働いています。

先程も触れたように、「チャートは人の集合心理を視覚化したものだ」という前提に立つならば、その普遍的な法則は間違いなく相場の世界に通じているのではないのでしょうか。

相場を覗く自分自身のフィルターの精度を上げることによって、可能性は無限に広がっていく・・・

あをうし